

《卒業研究報告》

子どもの経済的状況に対する認識と 経済的状況がいじめに与える影響について

大内田 柊 (元治ゼミ)

はじめに

現代社会の大きな問題のひとつには、教育現場における「いじめ問題」が挙げられる。2022年度（令和4年度）の文部科学省の調査によれば、いじめの認知件数は合計681,948件、児童1000人当たりの認知件数は計53.3件、いじめを認知した学校数は29,842校、全学校数に占める割合は82.1%であり、いずれの数値も前年度と比べ増加している。また、いじめ防止対策推進法第28条第1項に規定する重大事態の発生件数は923件であり、前年度の706件から増加していた（文部科学省2022）。

2000年代以前からいじめ問題への対策は講じられてきたが、代表的なものとして2013年（平成25年）に施行された「いじめ防止対策推進法」が挙げられる。「いじめ防止対策推進法」第二条では、「この法律において「いじめ」とは、児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう」と定義された（文部科学省 2013）。

いじめ事件において、加害者がいじめを行った理由には様々なものが考えられる。例としては「楽しかったから」、「むかついたから」、「嫌いだから」、「自分の方が上であるとアピールしたかったから」などである。これらは十分に悪質な理由であり、

どのような理由であってもいじめを行うことをしてはいけなさと指導するべきである。指導することは大事なことであり、解決しなければ、被害者の心が晴れることはない。しかし、それと同時にそもそも被害者をださないことも必要である。そのためには、いじめを発生させないための研究が必要なのである。

いじめの理由には、被害者と加害者の関係性が大きく関わっているはずである。被害者が心身の苦痛を感じるほどの行為は、ある程度上下の関係、もしくはそれだけの行為を行えるほどの歪な力関係が存在しているから発生すると考えられる。その関係性は様々な要因によって作り出されるが、その要因のひとつに「経済的状況」があるのではないかと考察している。

例えば、グループ内での立場が弱く、いじめや嫌がらせの対象となってしまった児童は、実は比較的貧困家庭であり、それが理由で立場が弱かったという可能性がある。この例のような状況がどれだけあるかわからないが、可能性があると考えられる以上は検証すべきである。

本研究では、いじめ被害者・加害者それぞれの「経済的状況」がどのように認識されていたのかを検証し、いじめ被害者・加害者の経済的状況にどのような傾向があるのか明らかにすることを目的とする。

第1章 いじめの実態と現状

第1節 いじめの実態

いじめについて研究するにあたり、いじめの実態を把握することは重要なことである。そこで、大小さまざまなスケールのいじめの内容を以下にまとめ、その実態について把握することにした。

文部科学省（2018）は「いじめ対策に係る事例集」を発表している。この事例集では、様々なパターンのいじめの概要、経緯及び対応、事例に対するコメントがまとめられている。それらを簡単にまとめ、実態を把握していく。

事例集の中で、「明らかに法のいじめに該当するので、いじめとして扱うべきもの等の具体例」として8つのケースが挙げられている。

それぞれ、

- Case01 加害・被害の関係性に気づきづらい事案
- Case02 「大丈夫」と答えたので苦痛を受けていると判断しなかった事案
- Case03 双方向の行為がある事案
- Case04、05 グループ内のトラブル
- Case06、07 組織的ないじめの認知
- Case08 いじめとして認知するが、「いじめ」という言葉を使わずに指導する対処例である。以下、各Caseの概要である。

●Case01 中学1年男子B（加害者）が中学1年男子A（被害者）に対し、女子生徒の嫌がることや、女子生徒への告白を「やらないと痛い目にあうぞ」などと強要してやらせており、今回の事案以外にも、同様のケースが複数あったという。また、普段の二人の様子は、主従関係があるようには見えず、普段は一緒に行動し、周囲には仲良くしているように見えていた。この点においては「本事例は、一見すると、対等な関係性の下で仲良く過ごしている2人の友人が、実際には加害－被害の関係（非対称的な力

関係）にあった事案である」とコメントされている。Bがこの出来事を起した動機については、これといって理由はなく、違う小学校出身の同級生に、自分の存在をアピールしようとしたのではないかと関係職員は見ている。ただ、Aは性格がおとなしく静かなタイプであったため、Bにとっては自分の言う通りになる都合のよい相手であったようである。

- Case02 中学2年女子A（被害者）と中学2年女子B（加害者）は同じグループの一員であり、Aはグループ内での立場が弱く、からかいやいじり、嫌がらせが起こるようになった。しかし、Aはグループの一員であるため自分がされて嫌だと思うことは嫌だと主張しており、いじめ被害を認めようとしないう。学校側は、客観的に見ていじめに当たる事案として捉え、いじめ対応チーム会議を開き対応した。指導に関しては、Bを直接指導することをAが望んでいないため、教育相談の中で示唆的に指導を行ったとしている。
- Case03 中学2年男子A（被害者）は、中学2年男子B、C、D、E（加害者）からあだ名で呼ばれており、AもB、C、D、Eに同じようにあだ名をつけてグループの輪に入ろうしているが、Aの行為だけが周囲から否定されている。Aはほかの4名と仲良くやりたいたいと思っており、あだ名も友情の証と捉えているが、なぜか自分の行為は否定されているような気がしているという。この事例においては、「あだ名で呼ばれることに対して、当該生徒が心身に苦痛を感じていることも勘案し、いじめに該当すると捉えて対応している。本事例のように、双方向の行為がある事案については、「いじめの防止等のための基本的な方針」にあるとおり、「けんかやふざけ合いであっても、見えない所で被

害が発生している場合もあるため、背景にある事情の調査を行い、児童生徒の感じる被害性に着目し、「いじめに該当するか否かを判断することが必要である」とし「Aの感じる被害性に着目して、個人面談や指導など必要な対策を講じたことは適切であったと考えられる」と評価されている。

- Case04 11月中旬、三日間に渡り、小学3年女子A（被害者）は登校班で登校中、同じ登校班の小学3年女子B（加害者）と小学4年男子C（加害者）から、「足を踏まれる行為」を複数回受けた。これにより、Aは心身ともに苦痛を感じていた。その行為を見ていた児童が担任に報告。しかし担任は、事実関係を確認し、「足踏み遊び」の中で起こった行為であったとして、校内の「いじめ対応チーム」には報告しなかった。11月下旬、Aは学校を欠席し、その日にAの父親が来校した。父親の訴えにより「しつこく足を踏まれる行為」を受けたことで、Aが心身ともに苦痛を感じていたことを初めて知ったという。学校は児童に聞き取り調査を行い、児童同士の謝罪をもって事案終結とし、保護者には電話連絡に留まっていた。12月中旬、Aは「同じクラスのBが怖い」という理由から1週間連続して欠席した。12月下旬、Aの父親がBとCの保護者を家に呼び出し、謝罪させるという事態が発生。学校が市教育委員会に「いじめ」の報告をしたのはその直後であった。
- Case05 知的障害を対象とする特別支援学校高等部1年男子B（加害者）は同じクラスの知的障害を対象とする特別支援学校高等部1年男子A（被害者）に近づき、突然左頬を叩いた。その様子を見た知的障害を対象とする特別支援学校高等部1年男子C（加害者）もまねをしてAの右頬を叩いた。3名は、普段一緒に過ごす

友達同士であり、最近ではBがからかい半分でAの肩や頭を叩くことがあったが、時間や場所、回数などはAもBも詳しく覚えていないという。Cは、Aを叩いたのは今回が初めてであった。学年会、特別指導委員会で協議を行った結果、「悪意はないが暴力、暴言といった行為であり、何より被害生徒が理由も分からず、苦痛を感じていたことにより、この案件をいじめと認定」した。

- Case06 高校1年女子A（被害者）から、同じ学級内の高校1年女子B（加害者）と席が近くなった際や体育等でペアを組む際に、Bから「最悪、地獄、キモい」と言われるなどの訴えがあった。学校側は、Aと仲の良い生徒3人から聞き取りを行ったところ「学級内の女子が2つのグループに分かれており、Aがもう一方のグループから毛嫌いされている。特にBのAに対する言動はひどい」という情報を得た。Aの保護者に報告すると、保護者は、Bに直接注意することは避けてほしいと述べた。学校は学年全体に指導することや本人の様子を定期的に伝えるなど、家庭と連携していくことを伝えた。その後、全体指導を行ったものの、状況の改善が見られず、Bに聞き取りを行うとともに指導を行うことを決定した。BはAに対する言動を認め、「Aに原因があるのではなく、自分に悪感情があるために行ったもの」と答えた。その後、Bに指導を行ったにもかかわらず改善が見られなかったことから、謹慎指導を行った。

- Case07 小学5年男子A（被害者）が、同じ学級の小学5年男子B、C、D（加害者）から継続的な仲間はずれや言葉による嫌がらせを受けていると、Aの保護者から相談があった。保護者によれば、いじめは休み時間や放課後等の担任の目の届かない場所で行われているという。

A、B、C、Dそれぞれに聞き取りを行い、Aが心身の苦痛を感じていることからいじめに該当するとして、いじめとして対応した。

- Case08 小学6年男子A（被害者）が同級生の小学6年男子B、C、D（加害者）から、下校中に冷やかしの言葉を浴びせられ、また、学校でBがAの靴のかかとを繰り返し踏もうとした。Aの母親が担任に話したことにより発覚した。母親からは、「本人が『先生に言ってほしくない。自分の力で仲良くなりたい』と強く言っているので、対応はしないでほしい。次、もし何かがあった場合はすぐに先生に言うように約束をしている」と伝えられ、学校は「もし今後、何かあればすぐに対応する」と約束をした。後日、BがAの上靴のかかとを踏もうとしているところを他クラスの担任が発見し、すぐに担任に伝え、そのままBから聞き取りを行った。B以外にAに嫌がらせをしている児童としてC、Dの名前が出たため、Aから事実確認した後、C、Dそれぞれからも聞き取りをした。内容はAやBが話していた内容と一致していたため、その後4人を集め事実関係を確認した後、指導を行った。

第2節 8つの事例をまとめて

前節で示した8つの事例からわかることや考えられることをまとめていく。

Case 1、2、4では、被害者と加害者の間で、立場に差が生まれている状態である点が共通していた。Case 1では主従関係のような状態、Case 2では、被害者はグループ内での立場が弱く、Case 4では、被害者は加害者に対して恐怖心を抱いていた。Case 4については、「しつこく足を踏まれる行為」が行われた後のことであるが、結果加害者と被害者の間に差が生まれていることから共通しているとした。また、その他のCaseでは、

立場の差は分からなかったが、被害者を仲間外れにすることや、言葉による嫌がらせを行うなどの行為は、なんらかの理由で被害者を下に見ている、もしくは自身のほうが上の立場であると思っているからこそ行っているのではないかと考察できる。

この事例集は、実際の教育現場において活用できるよう、様々なパターンのいじめと、その対応、ポイントとなる点などが記載されており、いじめの内容についてはすべてが記載されているわけではない。事例として分かりやすく、様々なパターンのいじめだからこそ、そのいじめが行われた理由やなぜ被害者が狙われたのか、立場や関係性の構築がどのように行われてきたのか、という点についても気になる所である。

第2章 先行研究からの知見

第1節 社会学的な研究の価値について

日本におけるいじめ研究は、社会学的・心理学的研究に加え、個人属性と集団属性という二項対立の枠組みでレビューされることが多いが、どちらの属性においても心理学的な研究の蓄積は多いものの、社会学的な研究の蓄積は少ないという（眞田 2022：18）。眞田（2022：19-21）や日野・林・佐野（2019：137-138）の社会学的研究のレビューからこれまでの社会学的ないじめ研究をまとめると、性別や年齢、地域や出身階層という社会的属性、空間や集団の在り方と価値観・空気感、学校という閉鎖性、傍観者、スクールカーストなどの視点から研究、学力低下や低所得化などいじめが被害者に与える長期的な影響についての研究もなされている。しかし、国内においてはいじめ経験に関する大規模な社会調査は実施されていなくデータがないことなどから、量的調査による社会学的研究は少ないと指摘されている（眞田 2022：22）。

以上のレビューからは、社会学的な研究の蓄積

は少なく、また量的な調査による研究も少ないことがわかる。そのため、社会学的な視点による研究は十分に価値があるだろう。

第2節 いじめと経済的状況の関連性について

いじめの発生要因に関して、【はじめに】で述べたように、経済的状況との関連があると考えている。これに関してもいくつかの先行研究がある。

2015年にOECDが発表したレポートによると、OECD加盟国内では、7人に1人の割合で子どもが貧困の影響を受けており、裕福でない家庭の子どものほうが学校でいじめに遭う可能性が高いことが分かっている（OECD 2015）。また、厚生労働省が行っている調査（第16回以降は文部科学省との共同調査）である、「21世紀出生児縦断調査（平成13年出生児）」の第13回調査（2014年実施）では、保護者へ「子どもを育てていて負担に思うことや悩み」を複数回答で聞いている。家庭の年収別に「子どもがいじめられている」と回答した保護者の比率を見ると、200万円未満では2.6%と最も高く、600万円以上800万円未満が1.1%ともっとも低いことが分かっている。また、家庭の年収が低くなっていくごとに、「子どもがいじめられている」と回答した割合も増加している（厚生労働省 2014）。これらの調査結果から、裕福な家庭と裕福でない家庭を比べた時、裕福でない家庭や貧困層の子どもたちのほうが、いじめられやすさ、いじめ被害に遭う可能性が高くなると考えられる。また、井上・田中（2023）の研究では、SES（社会経済的背景）が低い生徒はいじめの被害に遭いやすいうえで、相対的にSESの高い生徒がいじめの被害に遭わないようにするための支援の必要性を示唆している。社会経済的背景とは、両親の教育水準、両親の職業的地位、家庭の所得の3つで構成されている、生徒の家庭背景について、経済的な側面のみならず社会的・文化的な側面を考慮して作成する指標のことである（福岡教

育大学 2017：11）。

これらの先行研究では、裕福な家庭と比べ、そうではない家庭の子どもはいじめの被害に遭いやすいことを示唆している。しかし、実際にいじめの被害者が裕福ではない子どもだったのかどうかはわからない。また、加害者のほうが裕福ではない可能性もある。さらに、貧困や裕福ではないことを理由にいじめが行われていたのか、貧困が別の要因をつくり出し、それが理由となったのかどうかはわからなかった。

第3章 子どもの意識・認識といじめ

第1節 調査概要

第1項 仮説の設定

本研究では、「子どもがどれだけ経済的状況を意識しているのか」という点と、「いじめの被害者と加害者の経済的状況に共通点がみられるのか」という点を調査する。そこで以下の仮説を設定した。

●仮説1

「自身の経済的状況を意識している子どもは、友人やクラスメイトの経済的状況も意識している」

いじめの被害者・加害者に関わらず、子どもは学校という空間で生活するなかで、自分自身や周囲の人の経済的状況を意識的に認識しているのではないかと考えた。経済的状況から上下関係や非対称な力関係が生まれるとすれば、それは経済的な状況を意識し、比較しているからである。そのためこのような仮説を設定した。

●仮説2

「裕福だと思われる子どもほど、いじめの加害者になる」

●仮説3

「貧乏だと思われる子どもほど、いじめの被

害者になる」

貧困状態がいじめや嫌がらせを受けやすいというの、いくつかの先行研究や参考文献で指摘されている。しかしそれらでは、貧困家庭の子どもがいじめられやすいことを示唆する内容であり、実際のいじめの被害者が貧困状態であるかどうかはわからない。そこで、実際にいじめ被害者の経済状況がどのように認識されていたかを知るために設定した。また、加害者側も裕福であるから加害者になるという可能性もあるため、この仮説を設定した。

第2項 調査の方法

明星大学人文学部人間社会学科の学生に対し、Google Formsでのアンケート調査を行った。期間は2024年9月18日から10月18日の一カ月間で、回答者数は76名だった。性別ごとに分析を行うため、性別が無回答の回答を分析対象外とした、75名分のデータで分析を行う。

第2節 分析結果

第1項 経済的状況に対する意識と認識

表1は男性における、自分自身と同級生の経済

的状況に対する意識についてのクロス表である。自身の経済的状況に対し、「よく意識していた」と回答したのは4人であり、そのうちの2人は、同級生の経済的状況に対しても「よく意識していた」と答え、残りの2人も「たまに意識していた」と回答していた。自身の経済的状況に対し、「たまに意識していた」と回答したのは14人と最も多く、同級生の経済的状況に対しては「ほとんど意識していなかった」が最も多い7人、次いで「たまに意識していた」が6人だった。自身の経済的状況に対して「ほとんど意識していなかった」と回答したのは13人であり、そのうちの11人は、同級生の経済的状況に対しても「ほとんど意識していなかった」と回答した。自身の経済的状況に対し「まったく意識していなかった」と回答したのは10人で、そのうち半数の5人が「ほとんど意識していなかった」と回答し、「まったく意識していなかった」が3人、「よく意識していた」、「たまに意識していた」が1人ずつであった。

表2は、女性における、自分自身と同級生の経済的状況に対する意識についてのクロス表である。自身の経済的状況に対し「よく意識していた」と回答したのは2人であり、2人とも同級生の経済的状況に対しても「よく意識していた」と回答

表1 男性の、自分自身と同級生の経済的状況に対する意識についてのクロス表

男性		Q.2-3 小中学生時代に、同級生の経済的状況についてどの程度意識していましたか？				合計
		よく意識していた	たまに意識していた	ほとんど意識していなかった	まったく意識していなかった	
Q.2-1 小中学生時代に、自分自身の経済的状況についてどの程度意識していましたか？	よく意識していた	2 50.0%	2 50.0%	0 0.0%	0 0.0%	4 100.0%
	たまに意識していた	0 0.0%	6 42.9%	7 50.0%	1 7.1%	14 100.0%
	ほとんど意識していなかった	0 0.0%	0 0.0%	11 84.6%	2 15.4%	13 100.0%
	まったく意識していなかった	1 10.0%	1 10.0%	5 50.0%	3 30.0%	10 100.0%
合計		3 7.3%	9 22.0%	23 56.1%	6 14.6%	41 100.0%

表2 女性の、自分自身と同級生の経済的状况に対する意識についてのクロス表

女性		Q.2-3 小中学生時代に、同級生の経済的状况について どの程度意識していましたか？				合計
		よく意識 していた	たまに意識 していた	ほとんど意識 していなかった	まったく意識 していなかった	
Q.2-1 小中学生時代に、 自分自身の経済的状况について どの程度意識していましたか？	よく意識 していた	2 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 100.0%
	たまに意識 していた	0 0.0%	5 62.5%	1 12.5%	2 25.0%	8 100.0%
	ほとんど意識 していなかった	2 10.5%	5 26.3%	7 36.8%	5 26.3%	19 100.0%
	まったく意識 していなかった	0 0.0%	0 0.0%	1 20.0%	4 80.0%	5 100.0%
合計		4 11.8%	10 29.4%	9 26.5%	11 32.4%	34 100.0%

表3 男性の、自分自身の経済的状况に対する意識と認識についてのクロス表

男性		Q.2-2 小中学生時代に、自分自身の経済的状况について どのように感じていましたか？					合計
		とても裕福だと 感じていた	裕福だと 感じていた	普通だと 感じていた	貧乏だと 感じていた	とても貧乏だと 感じていた	
Q.2-1 小中学生時代に、 自分自身の経済的状况について どの程度意識していましたか？	よく意識 していた	0 0.0%	0 0.0%	2 50.0%	2 50.0%	0 0.0%	4 0.0%
	たまに意識 していた	0 0.0%	6 42.9%	5 35.7%	3 21.4%	0 0.0%	14 0.0%
	ほとんど意識 していなかった	0 0.0%	3 23.1%	10 76.9%	0 0.0%	0 0.0%	13 0.0%
	まったく意識 していなかった	1 10.0%	1 10.0%	7 70.0%	1 10.0%	0 0.0%	10 0.0%
合計		1 2.4%	10 24.4%	24 58.5%	6 14.6%	0 0.0%	41 0.0%

している。自身の経済的状况に対し「たまに意識していた」と回答したのは8人で、そのうち5人が同級生に対しても「たまに意識していた」と回答した。自身の経済的状况に対し「ほとんど意識していなかった」と回答したのは19人と多いものの、同級生に対しては「ほとんど意識していなかった」が7人、「たまに意識していた」、「まったく意識していなかった」が5人ずつ、「よく意識していた」が2人と分散していた。自身の経済的状况に対し「まったく意識していなかった」と回答したのは5人で、そのうち4人が同級生に対しても「まったく意識していなかった」と回答してい

た。

表3は、男性における、自分自身の経済的状况に対する意識と認識についてのクロス表である。自身の経済的状况に対し、どの程度意識していたとしても、自身の経済的状况を「とても貧乏だと感じていた」と回答したのは0人だった。自身の経済的状况を「よく意識していた」と回答した4人のうち、半数の2人が「普通だと感じていた」と回答し、残りの2人は「貧乏だと感じていた」と回答した。

自身の経済的状况を「たまに意識していた」と回答した14人のなかでは、「裕福だと感じていた」

表4 女性の、自分自身の経済的状況に対する意識と認識についてのクロス表

女性		Q.2-2 小中学生時代に、自分自身の経済的状況について どのように感じていましたか？					合計
		とても裕福だと感じていた	裕福だと感じていた	普通だと感じていた	貧乏だと感じていた	とても貧乏だと感じていた	
Q.2-1 小中学生時代に、自分自身の経済的状況についてどの程度意識していましたか？	よく意識していた	0	0	0	2	0	2
		0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
	たまに意識していた	0	0	7	1	0	8
		0.0%	0.0%	87.5%	12.5%	0.0%	100.0%
	ほとんど意識していなかった	2	2	15	0	0	19
	10.5%	10.5%	78.9%	0.0%	0.0%	100.0%	
まったく意識していなかった	1	0	4	0	0	5	
	20.0%	0.0%	80.0%	0.0%	0.0%	100.0%	
合計		3	2	26	3	0	34
		8.8%	5.9%	76.5%	8.8%	0.0%	100.0%

が6人で最も多く、「普通だと感じていた」が5人で2番目に多かった。自身の経済的状況を「ほとんど意識していなかった」と回答した13人のうち、10人が「普通だと感じていた」と回答し、残りの3人は「裕福だと感じていた」と回答した。自身の経済的状況を「まったく意識していなかった」と回答した10人のうち、7人が「普通だと感じていた」と回答し、「とても裕福だと感じていた」、「裕福だと感じていた」、「貧乏だと感じていた」がそれぞれ1人ずつだった。

表4は、女性における自分自身の経済的状況に対する意識と認識についてのクロス表である。表3同様、「とても貧乏だと感じていた」と回答したのは0人だった。自身の経済的状況を「よく意識していた」と回答した2人は、全員「貧乏だと感じていた」と回答した。自身の経済的状況を「たまに意識していた」と回答した8人のうち、7人が「普通だと感じていた」と回答していた。自身の経済的状況を「ほとんど意識していなかった」と回答した19人のうち半数以上の15人が「普通だと感じていた」と回答した。自身の経済的状況を「まったく意識していなかった」と回答した5人のうち、4人が「普通だと感じていた」と回答した。

第2項 経済的意識といじめ

表5は、男性における自身の経済的状況に対する認識といじめ加害者の経済的状況に対する認識についてのクロス表である。表1から表4までと違い、「嫌がらせ」や「いじめ」を見たことや経験したことがあると回答した男性23人に聞いたものとなっている。自身の経済的状況に対しての意識に程度に関わらず、「とても貧乏だと認識していた」と回答したのは0人だった。自身の経済的状況を「よく意識していた」と回答した人のなかでは、「とても裕福だと認識していた」、「裕福だと認識していた」がそれぞれ1人ずつだった。自身の経済的状況を「たまに意識していた」、「ほとんど意識していなかった」と回答した人では、「普通だと認識していた」が最も多く、「たまに意識していた」と回答した人では6人、「ほとんど意識していなかった」と回答した人では7人だった。自身の経済的状況を「まったく意識していなかった」と回答した人のうち、半数の2人が「普通だと認識していた」と回答し、「裕福だと認識していた」、「貧乏だと認識していた」が1人ずつだった。

表6は、女性における自身の経済的状況に対する認識といじめ加害者の経済的状況に対する認識についてのクロス表である。表5と同様の手順で、

表5 男性の、自身の経済的状況に対する意識といじめ加害者の経済的状況に対する認識についてのクロス表

男性		Q.3-1-B その「嫌がらせ」や「いじめ」の加害者の経済状況に対して、 どのように認識していましたか？					合計
		とても裕福だと 認識していた	裕福だと 認識していた	普通だと 認識していた	貧乏だと 認識していた	とても貧乏だと 認識していた	
Q.2-1 小中学生時代に、 自分自身の経済的状況について どの程度意識していましたか？	よく意識 していた	1 50.0%	1 50.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 100.0%
	たまに意識 していた	0 0.0%	2 22.2%	6 66.7%	1 11.1%	0 0.0%	9 100.0%
	ほとんど意識 していなかった	0 0.0%	1 12.5%	7 87.5%	0 0.0%	0 0.0%	8 100.0%
	まったく意識 していなかった	0 0.0%	1 25.0%	2 50.0%	1 25.0%	0 0.0%	4 100.0%
	合計	1 4.3%	5 21.7%	15 65.2%	2 8.7%	0 0.0%	23 100.0%

表6 女性の、自身の経済的状況に対する意識といじめ加害者の経済的状況に対する認識についてのクロス表

女性		Q.3-1-B その「嫌がらせ」や「いじめ」の加害者の経済状況に対して、 どのように認識していましたか？					合計
		とても裕福だと 認識していた	裕福だと 認識していた	普通だと 認識していた	貧乏だと 認識していた	とても貧乏だと 認識していた	
Q.2-1 小中学生時代に、 自分自身の経済的状況について どの程度意識していましたか？	よく意識 していた	0 0.0%	1 50.0%	1 50.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 100.0%
	たまに意識 していた	0 0.0%	4 66.7%	2 33.3%	0 0.0%	0 0.0%	6 100.0%
	ほとんど意識 していなかった	0 0.0%	1 7.1%	11 78.6%	1 7.1%	1 7.1%	14 100.0%
	まったく意識 していなかった	1 25.0%	0 0.0%	3 75.0%	0 0.0%	0 0.0%	4 100.0%
	合計	1 3.8%	6 23.1%	17 65.4%	1 3.8%	1 3.8%	26 100.0%

26人に聞いている。自身の経済的状況を「よく意識していた」と回答した人では、「裕福だと認識していた」と「普通だと認識していた」が1人ずつだった。自身の経済的状況を「たまに意識していた」と回答した人では、「裕福だと認識していた」が4人で最も多く、残りの2人は「普通だと認識していた」と回答した。自身の経済的状況を「ほとんど意識していなかった」と回答した人では、「普通だと認識していた」が最も多い11人であり、「裕福だと認識していた」、「貧乏だと認識していた」、「とても貧乏だと認識していた」が1人ずつだった。自身の経済的状況を「まったく意識していなかった」と回答した人では、「普通だと認識していた」が3人、「とても裕福だと認識していた」

が1人だった。

表7は、男性における自身の経済的状況に対する認識といじめ被害者の経済的状況に対する認識についてのクロス表である。自身の経済的状況に対する意識の程度に関わらず、被害者に対し「とても貧乏だと認識していた」と回答した人は0人だった。自身の経済的状況を「よく意識していた」と回答した人では、「裕福だと認識していた」、「普通だと認識していた」が1人ずつだった。自身の経済的状況を「たまに意識していた」、「ほとんど意識していなかった」と回答した人では、「普通だと認識していた」が最も多く、「たまに意識していた」と回答した人では7人、「ほとんど意識していなかった」と回答した人では6人だった。

表 7 男性の、自身の経済的状況に対する意識といじめ被害者の経済的状況に対する認識についてのクロス表

男性		Q.3-1-C その「嫌がらせ」や「いじめ」の被害者の経済状況に対して、 どのように認識していましたか？					合計
		とても裕福だと 認識していた	裕福だと 認識していた	普通だと 認識していた	貧乏だと 認識していた	とても貧乏だと 認識していた	
Q.2-1 小中学生時代に、 自分自身の経済的状況について どの程度意識していましたか？	よく意識 していた	0 0.0%	1 50.0%	1 50.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 100.0%
	たまに意識 していた	0 0.0%	1 11.1%	7 77.8%	1 11.1%	0 0.0%	9 100.0%
	ほとんど意識 していなかった	0 0.0%	2 25.0%	6 75.0%	0 0.0%	0 0.0%	8 100.0%
	まったく意識 していなかった	1 25.0%	0 0.0%	2 50.0%	1 25.0%	0 0.0%	4 100.0%
	合計	1 4.3%	4 17.4%	16 69.6%	2 8.7%	0 0.0%	23 100.0%

表 8 女性の、自身の経済的状況に対する意識といじめ被害者の経済的状況に対する認識についてのクロス表

女性		Q.3-1-C その「嫌がらせ」や「いじめ」の被害者の経済状況に対して、 どのように認識していましたか？					合計
		とても裕福だと 認識していた	裕福だと 認識していた	普通だと 認識していた	貧乏だと 認識していた	とても貧乏だと 認識していた	
Q.2-1 小中学生時代に、 自分自身の経済的状況について どの程度意識していましたか？	よく意識 していた	0 0.0%	0 0.0%	2 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 100.0%
	たまに意識 していた	0 0.0%	0 0.0%	3 42.9%	4 57.1%	0 0.0%	7 100.0%
	ほとんど意識 していなかった	0 0.0%	0 0.0%	10 71.4%	4 28.6%	0 0.0%	14 100.0%
	まったく意識 していなかった	1 25.0%	0 0.0%	3 75.0%	0 0.0%	0 0.0%	4 100.0%
	合計	1 3.7%	0 0.0%	18 66.7%	8 29.6%	0 0.0%	27 100.0%

自身の経済的状況を「まったく意識していなかった」と回答した人では、2人が「普通だと認識していた」と回答し、「とても裕福だと認識していた」と「貧乏だと認識していた」がそれぞれ1人ずつだった。

表8は女性における自身の経済的状況に対する認識といじめ被害者の経済的状況に対する認識についてのクロス表である。表7同様に、自身の経済的状況に対する意識の程度に関わらず被害者を「とても貧乏だと認識していた」と回答した人は0人だった。自身の経済的状況を「よく意識していた」と回答した人は、全員「普通だと認識していた」と回答していた。自身の経済的状況を「た

まに意識していた」と回答した人では、「貧乏だと認識していた」が4人で最も多く、残りは「普通だと認識していた」と回答していた。自身の経済的状況を「ほとんど意識していなかった」と回答した人のうち、10人が「普通だと認識していた」と回答し、残りの4人が「貧乏だと認識していた」と回答していた。自身の経済的状況を「まったく意識していなかった」と回答した人では、3人が「普通だと認識していた」と回答し、1人が「とても裕福だと認識していた」と回答した。

表9は、男性における自身の経済的状況に対する意識と、経済的状況がいじめの理由になるかどうかについてのクロス表である。自身の経済的状

表9 男性の、自身の経済状況に対する意識と被害者の経済的状況がいじめの理由になるかについてのクロス表

男性		Q.4-1 被害者の経済的状況が、「嫌がらせ」や「いじめ」の理由になると思いますか？				合計
		とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない	
Q.2-1 小中学生時代に、 自分自身の経済的状況について どの程度意識していましたか？	よく意識 していた	0 0.0%	2 50.0%	2 50.0%	0 0.0%	4 100.0%
	たまたま意識 していた	0 0.0%	9 64.3%	5 35.7%	0 0.0%	14 100.0%
	ほとんど意識 していなかった	1 7.7%	9 69.2%	1 7.7%	2 15.4%	13 100.0%
	まったく意識 していなかった	3 30.0%	5 50.0%	1 10.0%	1 10.0%	10 100.0%
合計		4 9.8%	25 61.0%	9 22.0%	3 7.3%	41 100.0%

表10 女性の、自身の経済状況に対する意識と被害者の経済的状況がいじめの理由になるかについてのクロス表

女性		Q.4-1 被害者の経済的状況が、「嫌がらせ」や「いじめ」の理由になると思いますか？				合計
		とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない	
Q.2-1 小中学生時代に、 自分自身の経済的状況について どの程度意識していましたか？	よく意識 していた	0 0.0%	2 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 100.0%
	たまたま意識 していた	1 12.5%	5 62.5%	2 25.0%	0 0.0%	8 100.0%
	ほとんど意識 していなかった	1 5.3%	12 63.2%	3 15.8%	3 15.8%	19 100.0%
	まったく意識 していなかった	0 0.0%	3 60.0%	2 40.0%	0 0.0%	5 100.0%
合計		2 5.9%	22 64.7%	7 20.6%	3 8.8%	34 100.0%

況を「よく意識していた」と回答した人では、「少し思う」、「あまり思わない」が2人ずつだった。自身の経済的状況を「たまたま意識していた」と回答した人では、9人が「少し思う」、5人が「あまり思わない」と回答していた。自身の経済的状況を「ほとんど意識していなかった」と回答した人では、「少し思う」が9人と最も多かった。自身の経済的状況を「まったく意識していなかった」と回答した人では、「少し思う」が5人と最も多く、「とても思う」が3人で2番目に多かった。

表10は、女性における自身の経済的状況に対す

る意識と、経済的状況がいじめの理由になるかどうかについてのクロス表である。自身の経済的状況を「よく意識していた」と回答した人では、全員が「少し思う」と回答していた。自身の経済的状況を「たまたま意識していた」と回答した人では、「少し思う」が5人と最も多く、「あまり思わない」が2人、「とても思う」が1人と続いた。自身の経済的状況を「ほとんど意識していなかった」と回答した人では、「少し思う」が12人と最も多く、「あまり思わない」、「まったく思わない」が3人と2番目に多かった。自身の経済的状況を「まっ

たく意識していなかった」と回答した人では、「少し思う」が3人、「あまり思わない」が2人だった。

第3節 結果のまとめ

第1項 質問項目ごとの結果

表1、表2では、自身と同級生の経済的状況に対する意識の程度について分析している。男性の場合、自身の経済的状況をよく意識していた人全員が、同級生の経済的状況に対しても意識していたと回答し、自身に対したまに意識していた人でも、同級生に対したまに意識していた人とほとんど意識していなかった人に分かれるような結果となった。自身に対してほとんどもしくはまったく意識してなかった人では、ほぼ全員が同級生に対しても意識していなかったと回答していた。同級生の経済的状況に対して、意識していた人は計12人だが、そのうち10人が自身に対しても意識していた人であった。逆に、同級生に対し意識していなかった人は計29人で、そのうち21人が自身に対しても意識していなかった人であった。また、女性の場合も似たような結果となっている。自身に対しよく意識していた人は、同級生に対してもよく意識していた人であり、自身に対してたまに意識していた人の中でも、同級生に対してたまに意識していた人が最も多くなっていた。自身に対しまったく意識していなかった人は、同級生に対しても意識していなかった。自身に対しほとんど意識していなかった人の場合は、同級生に対し19人中7人が意識していたと回答、残りの12人が意識していなかったと回答しており、男性に比べ女性の場合は偏っていなかった。このことから、男女ともに自身の経済的状況を意識していた人には、同級生の経済的状況に対しても意識していた人が多く、逆に自身の経済的状況を意識していなかった人には、同級生に対しても意識していなかった人が多い傾向にあることが分かった。

表3、表4では、自身の経済的状況に対する認

識の程度と、実際に自身の経済的状況をどのよう感じていたかを組み合わせている。男女ともに自身の経済的状況をとても貧乏だと感じていたという人は0人だった。次に、男性に注目してみると、自身の経済的状況をよく意識していたひとは、自身の状況を普通だと感じていたか貧乏だと感じていたかの2通りだった。たまに意識していた人になると、裕福だと感じていた人が最も多くなり、普通だと感じていた、貧乏だと感じていた人もいるなど、普通寄りに感じている人が多いことがわかった。自身の経済的状況をほとんど意識していない人になると、貧乏だと感じていた人がいなくなり、ほとんどが普通だと感じ、裕福だと感じていた人もいた。自身の経済的状況をまったく意識していなかった人も、普通だと感じていた人がほとんどで、とても裕福、裕福、貧乏に感じていたにそれぞれ1人ずつだった。女性に注目すると、自身の経済的状況をよく意識していた人は全員貧乏だと感じており、たまに意識していた人では、裕福だと感じていた人がいなく、ほとんどが普通だと感じていた。ほとんど意識していなかった人でも、ほとんどが普通だと感じており、貧乏だと感じていた人はおらず、とても裕福もしくは裕福だと感じていた人が2人ずついた。まったく意識していなかった人も普通だと感じていた人が4人、とても裕福だと感じていた人が1人だった。

このことから、男女ともにどの程度意識していたとしても、とても貧乏だと感じていた人はいなく、意識していた人は普通もしくは貧乏に感じていた人が多く、意識していなかった人は普通もしくは裕福に感じていた人が多いことが分かった。

表5、表6は、自身の経済的状況に対する意識の程度と、「嫌がらせ」や「いじめ」の加害者に対する認識を組み合わせたものである。男性の場合、加害者に対してとても貧乏だと認識していた人はいなかった。よく意識していた人は、とても裕福もしくは裕福だと認識していたが、それ以外

では、普通だと認識していた人が多く、裕福もしくは貧乏だと認識していた人はそれぞれ1人から2人程度だった。自身の経済的状況をどの程度意識していたかによらず、ほとんどが加害者の経済的状況を普通だと感じていた。女性の場合も加害者をととても裕福だと認識していたのは、自身の経済的状況をまったく意識していなかった人の1人であり、加害者をととても貧乏だと認識していた人も、自身の経済的状況をほとんど意識していなかった人の1人であった。意識の程度に関わらず普通だと認識していた人が多いものの、自身の経済的状況をたまに意識していた人では、加害者を裕福だと感じていた人がより多かった。男女合わせて計49人で、このうち32人が普通だと認識していたことに加え、貧乏だと認識していた人が3人であったことに対し、裕福だと認識していた人は11人だった。

これらのことから、必ずしも加害者は裕福だと思われていたわけではなく、普通と認識していた人が多かったが、男女合わせて、貧乏だと認識していた人よりも裕福だと認識していた人のほうが多いことが分かった。

表7、表8は、自身の経済的状況に対する意識の程度と、「嫌がらせ」や「いじめ」の被害者に対する認識を組み合わせたものである。男女ともにとても裕福だと認識していた人はおらず、共通して、自身の経済的状況をまったく意識していなかった人のなかで、とても裕福だと認識していた人が1人ずついた。また、被害者に対して普通だと認識していた人が最も多かった。男性に注目すると、自身の経済的状況をよく意識していた人のなかでは、被害者に対し普通だと認識していた人、裕福だと認識していた人がそれぞれ1人ずついた。自身の経済的状況をたまに意識していた人、ほとんど意識していなかった人、まったく意識していなかった人では、被害者に対し普通だと認識していた人が多かった。女性の場合、自身の経済

的状況をまったく意識していなかった人の1人が、被害者に対しとても裕福だと認識していたと回答しているが、それ以外では、とても裕福だと認識していた人と裕福だと認識していた人は0人であった。自身の経済的状況をたまに意識していた人では、被害者を貧乏だと認識していた人が最も多い4人だったが、普通だと認識していた人も3人いた。男女合わせて計50人であり、このうち34人が被害者の経済的状況を普通だと認識しており、貧乏だと認識していたのは10人、裕福だと認識していたのは6人だった。

これらのことから、男女どちらも普通だと認識していた人が最も多く、必ずしも被害者が貧乏だと認識されていたわけではなかった。また、裕福だと認識していた人よりも貧乏だと認識していた人のほうが多かったが、男女別にみれば男性の場合は裕福だと認識していた人が5人、貧乏だと認識していた人が2人、女性の場合は裕福だと認識していた人が1人、貧乏だと認識していた人が8人と全く違う傾向が見られていることから、性別による何らかの差が生まれている可能性があることが分かった。

表9、表10は、自身の経済的状況に対する意識の程度と被害者の経済的状況が「嫌がらせ」や「いじめ」の理由になるかどうかを組み合わせたものである。男女ともに半数以上が「少し思う」と回答している。男性の場合、自身の経済的状況をよく意識していた人とたまに意識していた人のなかでは、「とても思う」、「全く思わない」と回答した人はおらず、「少し思う」と「あまり思わない」に偏った。ほとんど意識していなかった人とまったく意識していなかった人のなかでは、「少し思う」が最も多く残りは分散している。女性の場合、自身の経済的状況をよく意識していた人は、全員「少し思う」と回答しており、それ以外の人に関しても、「少し思う」が最も多く回答されていた。

男女ともに似たような比率になっていることか

ら、性別による差はあまり見られず、また、「少し思う」が最も多く回答され、それ以外に関しては概ね分散傾向にあることが読み取れた。

第2項 仮説に対する結果

今回の調査では、有効回答は75名分、「嫌がらせ」や「いじめ」についての質問項目となるとさらに少なくなる。そのため、本調査における分析結果から見られた傾向や特徴などから、仮説を完全に検証することは不可能であり、以下の結果の解釈には注意が必要であるということを前提に進めていく。

本研究で設定した仮説は「自身の経済的状況を意識している子どもは、友人やクラスメイトの経済的状況も意識している」、「裕福だと思われる子どもほど、いじめの加害者になる」、「貧乏だと思われる子どもほど、いじめの被害者になる」の3つであった。

表1、表2の意識の程度について、自身の経済的状況を「よく意識していた」、「たまに意識していた」という人を合わせた「意識していた」グループと、「ほとんど意識していなかった」、「まったく意識していなかった」という人を合わせた「意識していなかった」グループの2つ、同級生の経済的状況に対しても同じようにグループ分けし、計4つのグループに分けて考えると、自身の経済的状況を「意識していた」グループは、同級生の経済的状況に対しても「意識していた」と多く回答していた。逆に、自身の経済的状況を「意識していなかった」グループは、同級生の経済的状況に対しても「意識していなかった」と多く回答していた。これは男女ともに当てはまっている。このことから、今回の調査結果では、自身の経済的状況を意識している人は、同級生の経済的状況も意識しており、逆に自身の経済的状況を意識していない人は、同級生の経済的状況も意識していない傾向にあることがわかった。

表3、表4では自身の経済的状況の意識の程度ごとに、経済的状況をどのように感じていたのかをまとめたが、基本的には「普通だと感じていた」という人が多く、大きな偏りはなかった。しかし、自身の経済的状況を「意識していた」グループでは、男性では6人が「裕福だと感じていた」と回答していたものの、「貧乏だと感じていた」と5人が回答しており、女性では、「普通だと感じていた」、「貧乏だと感じていた」の2つだけが回答されていた。逆に、「意識していなかった」グループでは、男性では1人以外が、女性ではこのグループの全員が「とても裕福だと感じていた」、「裕福だと感じていた」、「普通だと感じていた」と回答していた。これは、自身の経済的状況を意識していた人は、自身の経済的状況を普通もしくは貧乏だと感じ、逆に自身の経済的状況意識していなかった人は普通もしくは裕福だと感じている傾向にあることを示唆している。

表5から表8で使用したQ.3-1-B、Q.3-1-Cは、「嫌がらせ」や「いじめ」の被害者と加害者について聞いたものであり、本調査の中で「嫌がらせ」や「いじめ」を見たことや経験がある人を対象としている。この分析では、特に自身の経済的状況に対する意識の程度ごとに偏りは見られなかった。加害者に対する認識と被害者に対する認識を比べた時、男性の場合、加害者に対し「貧乏だと認識していた」「とても貧乏だと認識していた」は2人、被害者に対しても2人であった。それに対して、「裕福だと認識していた」、「とても裕福だと認識していた」と加害者を認識していたのは6人、被害者に対しては5人と被害者と加害者どちらも「裕福」だと認識していた人が多い結果となった。しかし、女性の場合、加害者を「貧乏だと認識していた」、「とても貧乏だと認識していた」は2人だが、被害者に対しては8人だった。また、加害者を「裕福だと認識していた」、「とても裕福だと認識していた」は7人、被害者の場合

は1人だった。男女合わせれば、加害者を裕福だと認識していた人が多く、被害者を貧乏だと認識していた人が多いことから、そのような傾向があるように感じられるが、男性の場合は、どの場合でも裕福だと認識していた人が多く、この傾向には当てはまらない。そのため、女性の結果では仮説通りとなっているが、男性の場合は仮説が正しいとは言えない結果となった。

また、表9、表10において、被害者の経済的状況が、「嫌がらせ」や「いじめ」の理由になるかどうかを組み合わせたが、男女ともに半数以上が「少し思う」と回答している。表9、表10で使用したQ.4-1は全員に聞いているため回答者数に違いはあるものの、被害者と加害者の経済的状況を普通だと認識していた人が多い上で、理由になると少し思うが最も回答されていることから、意識の程度やこれまでの経験上の認識によらず、経済的状況はいじめの理由になると思っている人が多いことが分かった。

第4節 考察

分析結果からも分かる通り、今回の調査では有効回答数が少なく、回答も偏りがあることから、分析結果が全てではない、ということに注意しなければならない。その前提の上で考察を進めていく。

まず、本研究の仮説の1つ目である、「自身の経済的状況を意識している子どもは、友人やクラスメイトの経済的状況も意識している」という仮説は、分析の結果正しいと言えることが分かった。さらに、自身の経済的状況を意識している人は自身の経済的状況を貧乏だと感じており、逆に意識していない人は裕福だと感じている傾向が見受けられた。自身の経済的状況を貧乏だと感じているからこそ、「経済力」という点が気になってしまうのかもしれない。逆に裕福だと感じていた人は、気にならないのかもしれない。今回の調査におい

ては、なぜ意識しているのかについては聞いていない。そのため理由についてはわからないが、意識の程度によって、経済的状況に対する感じ方に傾向が見られたということは事実であり、自分のことを意識しているほど、同級生に対しても意識しているということもわかったため、それぞれの経済力によって自身や他者に対する見方というのが変わっているのかもしれない。

また、調査の中で聞いた、「同級生の経済的状況に関する情報は、どのように知ることが多かったですか？最も多かったものと二番目に多かったものを選択してください」という質問では、最も多かったものでは、「同級生の身なりや会話、行動などから推測した」や「同級生から直接聞いた」、2番目に多かったものでは、「家庭の状況から推測した」、「同級生の身なりや会話、行動などから推測した」などが多く回答されていた。この質問は、同級生の経済的状況を意識していた回答した人にもみ聞いている。回答結果を見てみれば、多くが「推測した」と回答しており、「直接聞いた」や「別の友人に教えてもらった」という回答は少なかった。

友人との会話の中で、裕福であるとか、貧乏であるといった経済力が明らかに分かる話をするのは、あまり多くないだろう。仲の良い友人との間で、そのような話題になることはあるかもしれない。しかし、その友人たちに比べ仲が良いわけではないような、ただのクラスメイトとの会話であった場合、そのような話をするのは想像しにくい。だからこそ、さまざまな情報から推測して、それぞれに対して経済力を評価していると考察できる。

次に、2つ目と3つ目の仮説である、「裕福だと思われている子どもほど、いじめの加害者になる」と「貧乏だと思われている子どもほど、いじめの被害者になる」については、女性では仮説のように、いじめ加害者が裕福だと思われており、

被害者が貧乏だと思われる傾向が見られたが、男性ではどの場合でも裕福だと認識していたことから、男女によって違う結果となった。回答人数の少なさや、あくまでもどのように認識していたか、という質問であって、実際の経済力について当事者に聞いているわけではない。そのため、今回は女性においては仮説のような傾向が見られたものの、仮説が正しいと言うには全く足りないだろう。しかしながら、男女ともに加害者に対しては「貧乏」よりも「裕福」だと認識していた人が多いという共通点があり、全体で見れば「普通」だと認識していた人が多いものの、加害者に対しては「貧乏」よりも「裕福」が多かったことは重要な結果の一つではないだろうか。

経済的状況がいじめの理由になるかどうかについて、男女ともに半数以上が「少し思う」と回答していることは分析結果でも触れたことである。加害者・被害者の経済的状況を「普通」だと認識している人が多かったが、それでも理由になるかどうかを考えた時、「少し思う」が半数以上を占めており、「とても思う」を含めれば7割ほどが「思う」と考えているのである。ただし、この結果には社会学科の学生が対象であることや、現代のいじめ問題の在り方が影響していることが考えられる。社会学を専攻していれば、自然と「経済格差」や「教育格差」といった言葉を聞くことが多くなり、なんとなくでもそこに差が生まれているのではないか、それが原因なのではないかといった考えが生まれてもおかしくない。今回の場合は、「経済的状況」というワードによってお金の差をイメージし、実体験がなくとも、お金の差が更なる差を生み出し、それが理由となるだろうと想像する人が多いのは容易に考えられる。また、近年ではSNSやネットニュースでもいじめ事件というのは多く流れており、気にしなくとも目に入ることが多い。見出しの一部で、「金銭のやり取り」や「お金の貸し借り」などのワードがあれば、それが関

わっていると思う人は多いはずだ。なんとなくでもいじめの原因や発端にはお金が関わっていると思うことがあれば、今回の質問でも「思う」と回答することは自然であることから、このような結果になったのではないかと推察できる。

第4章 終わりに

本研究の背景には、「経済的状況」が上下関係や力関係を生み出し、それが「嫌がらせ」や「いじめ」に繋がっているのではないかと、という考えがあった。「経済的状況」がそのような関係を生み出しているのであれば、そこに関わる当事者のなかで、対象とする人物の経済力に対する評価があるはずである。例えば、実際に貧乏かどうかはわからないが、兄弟のお下がりの服を着ていて、あまり新しい服を着ない子どもに対し、高頻度で新しい服を買ってもらっているような子どもは、その部分だけをみて相手を評価し、煽るような発言を繰り返し、周囲に対し悪意を込めて吹聴するなどといった、明らかに相手を下に見ている行動をとるかもしれない。これは簡単に想像できたたとえ話であるが、全くないことだとは言いきれず、嫌がらせやいじめに発展する可能性が十分にある。こういった想像に対し、実態がどのようなものなのか明らかにしたいと考えたことが始まりであった。

そうした背景を元にして設定した仮説の結果について、改めてまとめる。

仮説1 「自身の経済的状況を意識している子どもは、友人やクラスメイトの経済的状況も意識している」では、分析の結果、自身の経済的状況を意識していた人たちの多くは、同級生に対しても意識していたこと、逆に自身の経済的状況を意識していなかった人たちの多くは、同級生に対しても意識していなかったことが分かった。この結果は、自身に対する意識の程度によって他者に対しても意識が変わり、経済的状況が他者との関わ

りに少なからず影響を与えていることを示唆している。

仮説2「裕福だと思われる子どもほど、いじめの加害者になる」では、分析の結果、ほとんどの人が特に裕福でも貧乏でもなく「普通」だと認識していたことが分かった。しかしながら「貧乏」と認識していた人よりも、「裕福」だと認識していた人の方が多かったことから、さらに多くの回答を集め分析を行うことでより詳細な傾向を掴むことが課題となった。

仮説3「貧乏だと思われる子どもほど、いじめの被害者になる」では、分析の結果、仮説2同様にほとんどの人が「普通」だと認識していたことがわかった。また、「普通」を除いたとき、男性の場合は「裕福」だと認識していた人が多く、女性の場合は「貧乏」だと認識していた人が多かった。そのため、さらに多くの回答を集め分析を行い、男女による違いを含めてさらなる検証を行うことが課題となった。

検証の結果、経済的状況に対する意識の程度によって、他者に対しても意識の程度が変わる傾向にあることや、多くの方が被害者・加害者に対して「貧乏」や「裕福」などの経済的な有利不利は感じていなかったことが分かった。また、概ね男女による違いは見られなかったものの、被害者に対する認識については男女による差がわずかながら見られたことから、男女によって意識や認識の違いが見られる可能性があることがわかった。

多くの方が、経済的状況がいじめの理由になると思っていることから、経済的状況によって生まれた歪な関係を簡単にイメージできるような経験があるか、もしくはそのような事例を聞いたことがある人が多いのかもしれない。このように今回の調査では、理由や実態について正確なデータが取れず、またデータ数の少なさから想像の域を出ないことで、仮説の検証から実態の究明、今後に対する提言まで、全てが中途半端な結果となって

しまった。今後の課題として、今回の調査内容に「その理由」や「具体的なエピソード」などを加えたより詳細な調査を行い、子どもたちの認識がどのようにして形成されるのか、経済的状況を理由にして本当に嫌がらせやいじめが行われるのか、その当事者がどのような認識を持っていたのかを調べ、いじめ発生のメカニズムを突き止め新たな対策を提言することが求められるだろう。

日々多くの教育関係者がいじめを無くすため奮闘している。法整備によって学校側がよりいじめ対策に注力することとなったが、これまでいじめとして扱われてこなかったような状況や行動がいじめとして扱われるようになった結果、いじめ認知数は増加し、教育関係者は休む暇もなく対応に追われている。

子どもたちがより楽しく、そして幸せに学校生活を送るために、そして子どもたちを支えようとする多くの大人たちのために、我々は今後もいじめについて研究し、よりの確な方法で、彼らをアシストしていく必要がある。

【謝辞】

アンケート調査にご協力いただいた明星大学人文学部人間社会学科の皆様には、厚く御礼申し上げます。

【参考文献リスト】

- ・福岡教育大学、2018、「児童生徒や学校の社会経済的背景を分析するための調査の在り方に関する調査研究」、(https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afeldfile/2017/11/28/1398296_1.pdf 2024年5月6日アクセス)。
- ・日野陽平・林尚示・佐野秀樹、2019、「いじめの心理学的・社会的要因と予防方法：先行研究のレビューと政策・実践・研究への提言」『東京学芸大学紀要・総合教育科学系』70（1）:131-158。

- ・井上敦・田中隆一、2022、「家庭の社会経済的背景のクラス内ランクがいじめ被害、欠席行動に及ぼす影響」、独立行政法人経済産業研究所、(<https://www.rieti.go.jp/jp/publications/nts/23e003.html> 2024年5月6日アクセス)。
- ・厚生労働省、2014、「第13回21世紀出生児縦断調査（平成13年出生児）及び第4回21世紀出生児縦断調査（平成22年出生児）の概況」、(<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/syusseiji/13/index.html> 2024年5月6日アクセス)。
- ・文部科学省、2013、「いじめ防止対策推進法（平成25年9月28日）」、(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1406848.htm 2024年5月6日アクセス)。
- ・文部科学省、2018、「いじめ対策に係る事例集」、(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/_icsFiles/afieldfile/2018/09/25/1409466_001_1.pdf 2024年5月6日アクセス)。
- ・文部科学省、2022、「令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」、(20231004-mxt_jidou01-100002753_1.pdf (mext.go.jp) 2024年5月6日アクセス)。
- ・OECD、2015、「最新のOECD How's Life?レポートによると、拡大する格差の影響を最も受けているのは子供」、(<https://www.oecd.org/tokyo/newsroom/children-paying-a-high-price-for-growing-inequality-oecd-how-s-life-report-finds-japanese-version.htm> 2024年5月6日アクセス)。
- ・眞田英毅、2023、「学校におけるいじめ研究の動向と課題：社会学の観点から」『同志社大学ハリス理化学研究報告』63（4）:189-199。